第1章：悠久の時と湯けむりの宿

北側の諸国に特有の、肌を刺すような冷たい風が止んだ。視界の先には、湯気をもうもうと上げる古びた、しかし風情のある木造建築が佇んでいる。秘湯として名高い、山奥の温泉宿だ。

「……寒い」

隣でぽつりと呟く声がした。振り返ると、白い防寒着に身を包んだエルフの少女――フリーレンが、あからさまに不機嫌そうな顔で立ち止まっている。トレードマークのツインテールが寒風に揺れ、その先端も心なしか元気がない。千年以上生きる偉大な魔法使いであり、かつて魔王を倒した英雄の一人。そんな肩書きとは裏腹に、今の彼女はただの寒がりな少女にしか見えなかった。

僕が彼女の手を握って自身のポケットに入れると、ひやりとした冷たい指先が伝わってくる。

「……温かい」

フリーレンは少しだけ表情を緩め、僕の方へ身体を寄せてきた。普段は感情の起伏が少ない彼女だが、こうして二人きりになると、猫のように距離を詰めてくる。僕のことを呼ぶとき、彼女は名前も「あなた」といった代名詞も使わない。ただ、視線を合わせ、触れてくるだけ。それが僕たちの間の、言葉よりも確かな合図だった。

「もうすぐ宿だよ。温かい温泉と、美味しい食事が待ってる」「ん。……メルクーアプリンはあるかな」「たぶんあるよ。なかったら魔法で出せばいい」「魔法は万能じゃないよ。……でも、期待しておく」

宿の暖簾（のれん）をくぐると、ふわりと硫黄と畳の香りが漂ってきた。

案内された部屋は、「松の間」。広縁からは雪化粧をした庭園が一望できる、素晴らしい部屋だった。だが、フリーレンの興味は景色よりも部屋の中央にある炬燵（こたつ）にあるらしい。防寒着を脱ぎ捨てるやいなや、彼女は軟体動物のように炬燵へと潜り込んだ。

「……極楽」

卓上に頬を乗せ、だらしなく目を細めるフリーレン。その無防備な姿に、僕は思わず息を呑む。防寒着の下は、彼女の普段着である白いワンピース姿なのだが――

一つだけ決定的な違いがあった。

それは、その小柄で華奢な身体には不釣り合いなほどに、巨大な双丘が備わっていることだ。

普段はローブやマントで隠されているが、薄着になればその暴力的なまでの質量は隠しようがない。うつ伏せになったことで、豊かな胸が畳と自身の体重に挟まれ、むにゅりと形を変えて横へ溢れ出している。千年の時を経てもなお成長を続けているのか、あるいは何かの魔法の副作用か。その理由は定かではないが、彼女の童顔と、麻呂眉の浮いたあどけない表情とのアンバランスさが、背徳的な魅力を放っていた。

「……なに？　ジロジロ見て」

視線に気づいたのか、フリーレンが半眼でこちらを見上げる。

「いや、フリーレンが可愛くて」「……ふん。口が上手いね」

素っ気なく返すが、彼女の長い耳が少しだけ赤らんでいるのを僕は見逃さない。彼女は感情が希薄だと言われているが、僕にだけは、こうして微かな反応を見せてくれる。

「ほら、温泉に行く前に浴衣に着替えよう。汗かいちゃうよ」「……面倒くさい。魔法で着替えさせて」「だめ。そういうのは風情がないでしょ」「人間の『風情』へのこだわりは、理解に苦しむよ……」

文句を言いつつも、彼女はのっそりと炬燵から這い出してきた。

用意されていたのは、藍色の生地に白い花柄があしらわれた上品な浴衣だった。フリーレ

ンは慣れた手つきで服を脱いでいく。白いワンピースが床に落ち、下着姿になる。

その瞬間、部屋の空気が湿度を増した気がした。白い肌、華奢な肩、くびれた腰。そして、その中央に鎮座する、重力に逆らうように自己主張する二つの果実。薄い布地ごしに、その先端の突起までもが微かに主張しているのがわかる。

「……手伝って」

フリーレンが浴衣を羽織りながら、困ったような顔でこちらを見た。

「帯？」「ん。……前が、閉まらない」

彼女が両手で浴衣の合わせを抑えているが、その胸のボリュームのせいで生地が大幅に引っ張られ、はだけそうになっているのだ。規格外の大きさゆえに、通常の着付けでは胸元が露わになってしまう。

僕は彼女の背後に回り、帯を持って彼女の身体に腕を回した。背中から抱きしめるような格好になる。彼女の髪から、微かに甘い花のような香りがした。

「じっとしててね」「……ん」

帯を締めようとすると、どうしても彼女の胸の下あたりに手が触れる。そのたびに、柔らかく、それでいて弾力のある感触が手に伝わり、理性が揺らぐ。フリーレンは抵抗することなく、むしろ少し背中を僕の胸に預けるようにして体重をかけてきた。

「……きつい？」「ううん。……ちょうどいい」

彼女の声が、少しだけ潤んで聞こえた。帯を結び終え、前へ回って襟元を整える。だが、どれだけ整えても、その豊かな谷間は隠しきれず、むしろ浴衣の襟が胸の膨らみに沿って曲線を描くことで、より一層その大きさを強調してしまっている。

白い肌と藍色の浴衣のコントラスト。そして、そこから覗く圧倒的な「女性」の象徴。

「……変？」

フリーレンが不安そうに上目遣いで尋ねてくる。

「いや、すごく似合ってる。……ただ」「ただ？」「目のやり場に困るくらい、魅力的だってこと」

僕がそう伝えると、フリーレンは小さく口元を緩めた。それは、数十年、数百年に一度見せるかどうかの、希少で美しい微笑みだった。

「……変な人。千年以上のババアに欲情するなんて」

彼女はそう言いながら、僕の首に手を回し、爪先立ちをして顔を近づけてくる。吐息がかかる距離。彼女の大きな胸が、柔らかく僕の胸に押し付けられる。

「でも……嫌いじゃないよ、そういう視線」

囁くような声とともに、彼女の唇が僕の頬をかすめた。温泉に入る前から、僕たちの体温はすでに上がりきっていた。

「……ねぇ」

フリーレンがとろんとした瞳で僕を見つめる。

「温泉、行くんでしょ？ ……それとも、ここでする？」

その言葉は、無垢な問いかけなのか、それとも計算された誘惑なのか。長命種である彼女の時間感覚からすれば、温泉に行く前の少しの情事など、瞬きするほどの時間でしかないのかもしれない。

「温泉に行こう。……そのあと、たっぷりと愛させて」

僕がなんとか理性を保ってそう答えると、フリーレンは少しだけ残念そうに、でも嬉しそうに頷いた。

「わかった。……じゃあ、早くして。湯冷めしちゃう」

彼女は僕の手を引き、部屋を出る。浴衣の裾から覗く白い足首と、歩くたびに揺れる胸元の景色を焼き付けながら、僕は彼女と共に廊下へと進んだ。

第12章：フェルンの影と、たわわな魔力の果実

脱衣所の籐籠（とうかご）に浴衣が滑り落ちる音が、やけに大きく響いた。冷え切った山の空気が肌を撫でるはずなのに、僕の身体は芯から熱を帯びている。その原因は、目の前に立つ彼女——フリーレンの、あまりにも暴力的な肢体にあった。

「……見て」

彼女は一糸まとわぬ姿で、これ見よがしに胸を張った。ずしり、という重みを感じさせるような動作と共に、真っ白な肌に包まれた二つの巨大な丘が、たっぷんと大きく揺れる。それは、かつて彼女が「貧相」と自虐していた頃の面影など微塵もない、圧倒的な質量だった。

「凄いでしょう。……これ、フェルンの解析結果を元に構築したんだよ」

フリーレンは自慢げに、その豊満な胸を下から両手で持ち上げた。むにゅり、と指が白い肉に沈み込み、溢れた肉が指の間からこぼれ落ちる。淡い桜色の先端が、艶かしく上を向いて僕を睨んでいた。

「フェルンったら、シュタルクに見せつけるみたいに身体を成長させて……。弟子のくせに、師匠より目立つなんて生意気だと思わない？」

彼女は拗ねたように唇を尖らせるが、その瞳は勝ち誇ったような色を帯びている。魔法使いとしての探究心か、それとも単なる女としての意地か。彼女は「胸を大きくする魔法」を行使し、自らの身体を作り変えてしまったのだ。しかも、元になったフェルンのそれより

も、さらに一回り大きく、感度さえも高めるように調整して。

「……触っていいよ。私が作った傑作、確かめてみて」

誘うような言葉と共に、彼女が一歩近づく。歩くたびに、その重たい果実は左右にブルン、ブルンと暴れ、視覚的な快楽を脳髄に叩き込んでくる。

露天風呂の湯気は濃く、視界を白く染め上げていた。源泉かけ流しの湯が岩肌を打つ音と、僕たちが湯船に身を沈める水音だけが響く。

「……んっ、あ……」

湯に浸かった瞬間、フリーレンの口から甘く、とろけるような吐息が漏れた。お湯の熱さが、魔法で敏感になった彼女の肌を刺激したのだろうか。彼女は僕の太ももの上に跨るようにして、向かい合わせに座り込んだ。

「……ふふ。お湯に浮く。面白い」

彼女は自身の胸を見下ろして笑った。浮力をもってしても沈みきらない、巨大な双丘。お湯の表面にぷかぷかと浮かぶその様は、白くて柔らかい水風船のようだ。お湯に濡れた肌はさらに輝きを増し、湯気で湿ったツインテールが鎖骨や胸の谷間に張り付いている。その情景の破壊力に、僕は言葉を失い、ただ彼女の腰を支えることしかできない。

「ねぇ、黙ってないで。……感想は？」

彼女が不満げに腰を揺らす。水中でお互いの下半身が擦れ合い、滑らかな肌の感触がダイレクトに伝わってくる。

「最高だよ。フェルンより……ずっと魅力的だ」「……ん。合格」

満足げに微笑むと、彼女は僕の首に腕を絡め、体重を預けてきた。瞬間、圧倒的な柔らかさが僕の胸板を押し潰す。

むぎゅぅぅ、と音が出そうなほどの密着。布越しではない、素肌と素肌の触れ合い。熱いお湯の中で、彼女の体温と柔らかさだけが鮮明に感じられる。

「……もっと、褒めて。この身体、気に入ってるんだから」

耳元で囁かれる声は、普段の淡々とした口調とは裏腹に、熱く湿っていた。彼女の呼気が耳殻をくすぐり、背筋に電流が走る。

僕は彼女の要望に応えるべく、その豊満な胸へと手を伸ばした。掌（てのひら）で包み込もうとするが、あまりの大きさに到底収まりきらない。指先に力を込めると、吸い付くような弾力と共に、彼女の身体がピクリと跳ねた。

「……あっ、……んんっ……！」

艶めかしい声が、静かな露天風呂に反響する。エルフは感情が希薄だなんて、誰が言った

のか。今の彼女は、僕の指使い一つに敏感に反応し、とろんと蕩けた瞳でこちらを見つめている。

「……そこ、気持ちいい。……魔力回路を、弄られてるみたい」

彼女は僕の手を上から自身の手に重ね、より強く、より深く胸に押し付けてきた。こね回すように揉みしだくと、彼女の口から「はぁ、はぁ」という切迫した呼吸が漏れ始める。

「フェルンは、いつもこんな重りを抱えてたんだね……。でも、悪くない重さだ」「フリーレン、顔が赤いよ。のぼせた？」「……違う。のぼせたのは、お湯のせいじゃない」

彼女は潤んだ瞳で僕をねめつけると、僕の耳を甘噛みした。長いエルフ耳が、興奮で真っ赤に染まっているのが見える。

「……責任、取ってよね。こんな淫らな身体にしたのは、誰に見せるためだと思ってるの」

彼女は僕の手を取り、さらに際どい場所——胸の谷間の奥深く、心臓の鼓動が激しく打つ場所へと導く。そこは熱く、湿り、僕を受け入れる準備ができていた。

「ここじゃ狭い。……部屋に戻ろう？　続きは、ベッドの上で」

懇願するように、それでいて命令するように、彼女は僕の唇を奪った。硫黄の香りと、彼女特有の甘い花の香りが混じり合い、理性の最後の留め金が外れる音がした。

湯船から立ち上がると、濡れた身体から滴る雫が、白い肢体を伝って流れ落ちる。月明かりに照らされたその姿は、千年を生きる魔法使いの威厳などかなぐり捨てた、ただ愛を乞う一人の「女」の姿だった。

第3章：白き肉の峡谷と、甘美なる捕食

部屋に戻るやいなや、僕は敷かれたばかりの布団の上に押し倒された。抵抗する間もなかった。いや、抵抗する気など起きなかったと言うべきだろう。視界のすべてが、フリーレンの白く柔らかな肢体によって埋め尽くされていたからだ。

「……もう、我慢できない」

彼女は僕の腹の上に跨ると、浴衣を乱暴に脱ぎ捨てた。露わになったのは、魔法で限界まで増幅された、凶悪なまでの肉体美。照明の光を浴びて艶めく巨大な双丘が、重力に従ってどぶん、と垂れ下がる。その先端、昂ぶりきった桜色の突起が、僕の目の前であからさまに誘惑していた。

「見て。……早く、ここに入れて欲しがってる」

フリーレンは自身の豊かな胸を両手で鷲掴みにし、中央に深い深い谷間を作り出した。フェルンへの対抗心で作られたその峡谷は、男の理性を吸い込む底なしの沼のようだ。

「ん……挟んであげる。……フェルンには真似できない、大人の魔法」

彼女は腰を落とし、僕の猛りきった熱を、その圧倒的な肉の塊で捕獲した。

「――っ！？」

熱い。そして、柔らかい。絹のように滑らかな肌と、内側に詰まった密度の高い脂肪が、僕の楔（くさび）を四方八方から圧迫する。ヌルリとしたローションも魔法も必要ないほど、彼女の肌は汗と愛液で湿り、極上の潤滑油となっていた。

「……ふふ。すごい顔。……気持ちいい？」

フリーレンが腰を前後に揺らし始める。ズブ、チュプ、クチュ…… 肉と肉が擦れ合い、空気が弾ける卑猥な水音が、静かな和室に響き渡る。彼女が動くたびに、巨大な乳房が波のように変形し、僕の視界を白一色に染め上げる。

「……んっ、あ……っ。……硬い。……血管、浮いてるのわかるよ……」

彼女は蕩けた瞳で見下ろしながら、自身の胸に埋没する僕の一部を愛おしげに見つめた。麻

呂眉をハの字に歪め、呼気が熱を帯びる。

「フェルンのは……まだ成長途中だもんね。……完成された私の胸のほうが、ずっと……気持ちいいでしょ……？」

嫉妬と優越感がない交ぜになった問いかけ。彼女はわざと胸を強く押し付け、擦り上げるように動く。敏感になりすぎた乳首が僕の胸板を擦り、その刺激で彼女自身も「ひぁっ」と可愛らしい悲鳴を上げた。

「……だめ。胸だけじゃ、足りない」

不意に動きを止めたフリーレンは、欲求不満げに呟くと、僕の腹の上を這うように移動した。ツインテールの毛先が僕の太ももをくすぐる。彼女の顔が、僕の張り詰めた中心のすぐそばに来た。

「……匂い。すごい濃い」

彼女は鼻先を擦り付け、獲物を品定めするようにクンクンと匂いを嗅ぐ。そして、その小さな桜色の唇をゆっくりと開いた。

「……味も、確かめさせて」

ちゅぷ……

遠慮がちな音と共に、熱い口腔が僕の先端を捉えた。最初は確かめるように、舌先でカリカリと裏筋を舐め上げる。ざらついた舌の感触と、唾液のぬくもりが脳髄を揺らす。

「……んむ、……ちゅ……れろ……」

魔法の研究に没頭するときの、あの真剣な眼差し。それを今は、僕への奉仕に向けている。彼女は徐々に大胆になり、口を大きく開けて、亀頭を飲み込んだ。

「……んぐっ、……んんっ……！」

喉の奥を突かれる苦しさに、彼女の眉がピクリと跳ねる。だが、彼女は吐き出そうとはしない。むしろ、細い指で僕の根元を握りしめ、自分から奥へ奥へと飲み込んでいく。

「……んーーっ、……じゅるっ、じゅぽっ……！」

頬を限界まで膨らませ、頭を上下させる。エルフの小さな口にはあまりにも大きすぎる質量。それを無理やり受け入れる背徳感が、彼女をさらに興奮させているようだった。上目遣いにこちらを見るその瞳は、涙で潤み、完全なる服従と情欲の色に染まっている。

「（……大きい。……口の中、いっぱい……）」

言葉にならない声が、喉の振動として直接伝わってくる。吸い上げる吸引力は凄まじく、まるで魂まで吸い取られるような感覚。時折、鼻にかかった「んあ……っ」という甘い喘ぎ声が漏れ、それが最高のスパイスとなって僕を追い詰める。

「……そろそろ、限界？」

僕の腰が浮き、呼吸が荒くなったのを察知したのか、フリーレンが一旦口を離した。唾液の糸が銀色に輝き、僕と彼女の唇を繋ぐ。

「出すときは、教えて。……全部、欲しいから」

彼女は艶然と微笑むと、再び先端を咥え、今度は舌を絡ませながら激しくバキュームし始めた。

「……んんっ！ ……んぐっ、……ちゅぽっ、じゅるるるっ……！」

先ほどよりも速く、激しいリズム。柔らかい粘膜のひだ、巧みに動く舌、そして締め付ける喉の奥。すべてが快楽の塊となって襲いかかる。

「くっ、出る……！」「……んっ！！」

僕の警告に、彼女は目を見開き、さらに深く咥え込んだ。逃がさない。一滴も無駄にしないと言わんばかりに、喉の奥を大きく開く。

ドクン、と身体が跳ね、熱い奔流が解き放たれた。

「――んぐぅっ！ ……んっ、……ごくっ……！」

喉仏が上下する音が、生々しく響く。彼女はビクビクと脈打つそれを宥めるように、優しく吸い付きながら、溢れ出る白濁を飲み干していく。一度、二度、三度。「ごくん」という嚥下音が、彼女の身体の中に僕の一部が溶けていく合図だった。

すべての放出を終えても、フリーレンはしばらく離そうとしなかった。名残惜しそうに舌で先端を清め、最後にもう一度「ちゅっ」と音を立てて吸い付いてから、ようやく顔を上げた。

「……ぷはっ」

口元を白く汚したまま、彼女は気だるげに息を吐く。その表情は、極上の食事を終えた猫のように満ち足りていた。

「……ん。変な味。……でも、身体が熱くなる」

彼女はペロリと唇に残った雫を舐め取ると、僕の胸の上に突っ伏してきた。心臓の音が重なり合う。

「……どう？　フェルンより、上手だった？」

まだそのことに拘っているのか。僕は苦笑しながら、彼女の汗ばんだ髪を撫でた。「世界一だよ」と伝えると、彼女は「……知ってる」と小さく呟き、僕の首筋に顔を埋めた。

「……魔力、充填完了。……でも、まだ足りないかも」

彼女の指先が、再び僕の肌の上を這い回る。その瞳の奥には、まだ消えぬ情欲の炎がゆらめいていた。

「次は……私が気持ちよくなる番。……いいよね？」

第4章：聖なる雫と、焦らしの拷問

「……まだ、お腹空いてるでしょ？」

一度目の絶頂を迎え、少し気だるげに横たわっていた僕を、フリーレンが覗き込んでくる。その瞳は慈愛に満ちているようで、どこか嗜虐的な光を宿していた。彼女は自分の巨大な胸を両手で持ち上げると、僕の顔の真上に持ってくる。視界が、白い肌色で完全に埋め尽くされた。

「……これ。オプションで追加しておいたの」

彼女がムギュ、と豊満な肉を指で強く圧迫する。すると、張り詰めた桜色の突起の先端から、じわりと白い液体が滲み出し、雫となって僕の唇に滴り落ちた。

「――っ！？」

「……飲んで。私の魔力を変換して作った、特製のミルクだよ」

驚く僕をよそに、彼女はそのまま重たい乳房を僕の顔に押し付けた。鼻と口が、柔らかく温かい肉に塞がれる。甘いミルクの香りと、彼女の体臭が混ざり合い、脳が麻痺しそうだ。

「……んっ、……よしよし。……いい子」

彼女は僕の頭を抱きかかえ、まるで赤子をあやすように優しく撫でる。僕は本能に従い、目の前の突起に吸い付いた。

チュパッ、……ジュルッ、ゴクッ……

口の中に広がるのは、濃厚でコクのある甘み。現実の母乳とは違う、魔力そのものを液状化したような、不思議な昂揚感をもたらす味だ。僕が強く吸うたびに、フリーレンの背中がビクンと跳ねる。

「……んあぁっ！……っ、すごい吸引力……。……ふふ、そんなに美味しかった？」

彼女は恍惚とした表情で、自らの胸が貪られる快感に浸っている。吸われる刺激が子宮に響くのか、彼女の太ももが時折ピクリと痙攣し、僕の腰を締め付けた。

「……フェルンには、まだ早すぎる魔法だね。……大人の私だけが、あげられるご褒美」

彼女は勝ち誇ったように囁くと、もう片方の胸も僕の口元へと運んだ。左右の巨大なタンクから溢れ出る甘い蜜。僕はただ、その暴力的なまでの母性に溺れることしかできなかった。

「……いっぱい飲んでくれて、嬉しいけど。……まだ、出し切れてないみたいだね」

授乳を終え、僕の口元についたミルクを親指で拭いながら、フリーレンが視線を下に移す。そこには、先ほどの絶頂から回復し、再び鎌首をもたげた僕の欲望があった。彼女のミルクに含まれる魔力のせいか、回復力が異常に高まっているのだ。

「……元気なのはいいことだよ。……じゃあ、次はこれで抜いてあげる」

彼女は跨ったまま、ミルクで濡れて滑りやすくなったその巨大な双丘で、僕の熱を再び挟み込んだ。

「……んっ！ ……ぬるぬるして、気持ちいい……」

ローション代わりのミルクが、摩擦を極限まで減らし、とろけるような滑らかさを生み出している。先ほどのパイズリとは違う。今度は「液体」が介在することで、密着度が段違いだ。

ニチャ、グチュ、ズブッ……

卑猥な音が、部屋の空気を湿らせる。彼女はわざと体重をかけ、胸の脂肪の重みだけで僕を押し潰すように動く。

「……見て。君のが、私の胸に埋もれて……全然見えない」

フリーレンは自身の胸を見下ろし、サディスティックに笑った。巨大な肉塊の圧力。四方八方から締め付けられる圧迫感。そして、視覚を焼き尽くす圧倒的な質量。

「……っ、くうっ……！」「……ここ、いいんでしょ？ ……カリのところ、いじめてあげる」

彼女は巧みに胸の筋肉を動かし、一番敏感な部分をグリグリと刺激する。そのたびに、僕の腰が勝手に跳ね上がる。

「……いっちゃえ。……私の胸に、全部ぶちまけて」

彼女が動きを早める。ミルクと混ざり合う熱。限界を超えた刺激。

「――っ、出るっ！！」「……んんーーっ！ 受け止めてあげるっ！」

ドクンッ、と激しい脈動と共に、二度目の解放が訪れた。白濁した熱い液体が、彼女の美しい谷間に勢いよく放たれる。フリーレンは逃げることなく、その全てを白い肌で受け止めた。

射精の余韻に浸り、荒い息をつく僕。だが、フリーレンはまだ終わっていなかった。彼女は胸元を汚した白濁とミルクを、指ですくい取って舐めると、妖艶な手つきで自身の下腹部へと手を伸ばした。

「……すごかったね。……でも」

彼女がゆっくりと腰を浮かせ、浴衣の裾を大きく広げる。そこには、すでに愛液でぐっしょりと濡れそぼり、期待に震える秘所が露わになっていた。

「……本番は、これからだよ」

彼女は僕の先端――まだ敏感なままのそれに、自身の濡れた入り口をあてがった。亀頭と、蜜壺の入り口が触れ合う。熱と熱の接触。挿れれば極楽に行けるとわかっているのに、彼女はそこから動かない。

「……入れて、欲しい？」

上目遣いに、意地悪な問いかけ。彼女の秘肉が、ヒクヒクと渇望するように収縮しているのが見える。入り口がぬるりと僕を誘うが、彼女はまだ許さない。

「……お願いして。……千年の魔法使いを、君のものにしたいって」

彼女の爪先が、僕の胸板を甘く引っ掻く。焦らされる快感と、これから始まる行為への期待で、心臓が破裂しそうだ。

「……フリーレン、お願いだ。……中に入れたい」「……ん。……よくできました」

彼女はとろりと蕩けた笑顔を見せると、ゆっくりと、本当にゆっくりと腰を沈め始めた。

「……受け入れてあげる。……私の、一番深い場所へ」

先端が、ぬぷりと飲み込まれていく。その感覚は、今までのどんな魔法よりも神秘的で、抗えない力を持っていた。

第5章：悠久の時を越えて、君の中で果てる

「……んっ、……ぁあぁっ……！」

フリーレンが天井を仰ぎ、細い喉を反らせて絶叫した。焦らされ続けた彼女の秘所が、ついに僕の全てを飲み込んだ瞬間だった。きつい。あまりにもきつい。魔法で強化された彼女の肉体は、内部の締め付けすらも規格外だった。まるで熱を持った粘膜の壁が、侵入者を捕らえて逃がさないとばかりに、四方八方から吸い付いてくる。

「……すごい。……奥まで、入ってる。……私の深いところ、君でいっぱい……」

彼女は涙で潤んだ瞳を下ろし、繋がっている部分を見つめた。僕たちの結合部は、彼女の溢れ出る愛液と先ほどのミルクでぐしょぐしょに濡れ、動くたびに「ジュプッ、ヌチュッ」という卑猥な音を奏でている。

「……動いて。……私を、めちゃくちゃにしていいから」

彼女が両脚を僕の腰に絡め、踵（かかと）で背中をトンと叩く。それが合図だった。僕は理性のタガを完全に外し、腰を打ち付けた。

「――っ、くっ！」「……ぁっ！　んあぁっ！　……っ、ふぅっ、……んんっ！」

突き上げるたびに、フリーレンの巨乳が激しく波打つ。その暴力的なまでの揺れが、視覚的な快楽となって脳髄を焼き尽くす。彼女の小さな身体が、僕の衝撃で揺さぶられ、布団の上を少しずつずれていく。

「……はぁっ、はぁっ、……深いっ、……そこっ、……んあぁっ！」

普段の冷静な彼女からは想像もできない、甘く高い嬌声。それは千年を生きた大魔法使いの声ではなく、ただ快楽に翻弄される一人の「雌」の悲鳴だった。

「……キス。……キスして」

激しいピストン運動の中、フリーレンが必死に腕を伸ばし、僕の首に抱きついてきた。僕は動きを止めず、彼女の唇に覆いかぶさる。

チュッ、……んむ、……レロッ、……ジュルッ……

下半身で激しく繋がりながら、舌と舌もまた、濃厚に絡み合う。彼女の口内は熱く、甘く、僕の唾液を貪るように吸い付いてくる。息継ぎも忘れて、何度も、何度も角度を変えて唇を重ねる。唾液が混じり合い、口の端から銀色の糸となってこぼれ落ちる。

「……んっ、ぷはっ。……ん、……好き。……大好き……」

唇が離れた一瞬の隙に、彼女が小さく呟いた。名前も呼ばない。愛の言葉も滅多に口にしない彼女が、絶頂の最中に漏らした本音。その言葉が、僕の中で何かが弾ける引き金となった。

「フリーレン……っ！」「……んぁっ！ ……もっとっ！ ……奥、もっと突いてっ！」

僕は彼女の腰を掴み、さらに激しく、獣のように腰を振る。彼女の中のヒダが、僕のカリを擦り、しごき、快楽の波状攻撃を仕掛けてくる。最奥の子宮口をノックするたびに、彼

女の身体がビクン！と弓なりに跳ね、内壁がキュウゥゥと収縮して僕を締め上げた。

「……ああっ、だめっ！　……頭、おかしくなるっ！　……魔法が、暴走しちゃうっ……！」

彼女の瞳の焦点が合わなくなってくる。白目を剥きかけ、口からは涎が垂れ流しになる。それほどまでに、彼女は感じてくれていた。

「……もう、いく。……一緒に、いこう……？」

フリーレンが僕の背中に爪を立て、懇願するように囁く。その声はかすれ、熱に浮かされている。僕ももう限界だった。彼女の極上の膣肉に締め上げられ、暴発寸前のエネルギーが奔流となって出口を求めている。

「出すよ、フリーレン……！　中にっ……！」「……んっ！　……出してっ！　……君の全部、私の中にちょうだいっ！」

彼女が最後の力を振り絞り、腰を突き上げて迎撃体勢をとる。最奥で、最も深く繋がる位置で、僕たちは同時に限界を迎えた。

「――っ、うあぁぁぁっ！！」「――んんんーーーーっ！！！！！　ぁああっ！！」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ！

僕の身体が大きく痙攣し、熱い熱い白濁の奔流が、彼女の胎内へと勢いよく解き放たれた。一度では終わらない。二度、三度と脈打ち、魂を削り取るようにして注ぎ込む。

「……んぐっ、……ああっ、……熱いっ、……入ってきてるぅっ……！」

フリーレンは身体をガクガクと震わせながら、その全てを受け止めていた。彼女の膣壁がリズミカルに収縮し、最後の一滴まで搾り取ろうと吸い付いてくる。僕の放出した種が、彼女の最奥を満たし、溢れ出る感覚。それは、言葉では言い表せないほどの、圧倒的な多幸感だった。

長い長い絶頂の余韻が過ぎ去り、部屋には二人の荒い呼吸音だけが残った。僕は彼女の上に覆いかぶさったまま、脱力していた。まだ繋がっている。時折、後引く快感で彼女の中がピクピクと痙攣し、僕を優しく締め付ける。

「……ふぅ。……はぁ……」

フリーレンの呼吸が次第に整っていく。汗で濡れた前髪を優しく払いのけると、彼女はとろんとした瞳で僕を見つめ、満足げに微笑んだ。

「……気持ちよかった？」

彼女が小声で聞いてくる。

「ああ、最高だった。……人生で一番」「……ん。私も」

彼女は僕の頬に手を添え、愛おしげに撫でた。

「……魔力の供給以上に、満たされた気がする。……君とのこういう時間も、悪くないね」

彼女は身体をもぞりと動かす。結合部から、ジュルリと音がして、僕たちが離れる。その瞬間、白濁した液体が彼女の秘所から大量に溢れ出し、シーツを汚した。それは、僕たちが深く愛し合った何よりの証拠だった。

「……あーあ。こんなに出して」

フリーレンは溢れたソレを指ですくい、恥ずかしそうに、でも誇らしげに見せた。

「……責任取って、また綺麗にしてよね。……あとで」

「あとで？」「うん。……今は、このまま」

彼女は僕の胸に顔を埋め、ギュッと抱きついてきた。その大きな胸の柔らかさと、体温の温もりが、心地よい眠気を誘う。

「……おやすみ。……明日も、明後日も、その先も……よろしくね」

千年という途方もない時間を生きる彼女にとって、僕との時間は瞬きのようなものかもしれない。けれど、今この瞬間、彼女は確かに僕だけを見て、僕だけを感じてくれていた。

窓の外では、雪が静かに降り積もっている。湯けむりの宿で過ごした熱い夜は、二人の記憶に永遠に刻まれることだろう。

僕は彼女の温もりを感じながら、静かに目を閉じた。

エピローグ：朝陽に溶ける残り香と、永遠の契約

障子の隙間から差し込む朝日が、瞼を刺した。重い。身体が鉛のように重いけれど、それは

不快な重さではなかった。胸元に感じる温かい重量感と、鼻腔をくすぐる甘ったるい匂い――栗の花に似た雄の匂いと、彼女特有の花のような体臭が混ざり合った、情事の残り香。

「……んぅ……。……まだ、起きない……」

胸元で何かがもぞりと動いた。目を開けると、そこには至福の光景があった。フリーレンが、僕の胸を枕代わりにして、安らかな寝息を立てている。掛け布団は半ばはだけており、昨夜、僕が愛し抜いたその白い肢体が露わになっていた。

首筋や鎖骨、そして豊満な乳房には、僕がつけた赤いキスマークがいくつも散らばっている。それはまるで、真っ白なキャンバスに描かれた独占の証のようだ。

「……ふふ。……私の、すごい形になってる……」

彼女がうっすらと目を開け、自身の胸を見下ろして寝ぼけ眼で笑った。魔法で大きくした双丘は、重力に従って左右に流れ、僕の身体を覆い尽くしている。その先端、桜色の突起

はまだ少し充血しており、昨夜の激しさを物語っていた。

そして何より扇情的なのは、彼女の秘所だ。シーツには、昨日僕が注ぎ込んだ大量の白濁が、黄色い染みとなって広がっている。さらに、彼女の太ももの内側には、一晩経ってなお溢れ出た愛液と種が、カピカピに乾いて張り付いていた。

「……汚しちゃったね」「……ん。……君のせいだよ。……あんなに出すから」

フリーレンは咎めるような口調だが、その表情はどこか嬉しそうだ。彼女はわざと、乾きかけた白濁を指でカリカリと引っ掻いた。

「……これ、君の匂いがする。……私の身体の奥まで、君の匂いでいっぱい」

「……シャワー、浴びてくる？」「……やだ。……寒い」

フリーレンは僕の首に腕を回し、さらに強く抱きついてきた。素肌と素肌が密着する。彼

女の肌は少し汗ばんでおり、ペタペタと吸い付くような感触が心地よい。

「……もう少し、このまま。……余韻に浸らせて」

彼女が僕の耳元に顔を埋め、深く息を吸い込む。スゥーッ……ハァ…… 熱い吐息が鼓膜を震わせ、背筋にぞくりとした快感が走る。

「……んっ。……また、大きくなってる」

僕の下腹部の変化に気づいた彼女が、太ももを擦り寄せてきた。朝特有の生理現象とはいえ、彼女の柔らかいお腹と、ふっくらした恥丘が当たれば、反応しないわけがない。

「……元気だね。……昨日のあれだけじゃ、足りなかった？」

彼女の手が、シーツの下へ滑り込む。慣れた手つきで、硬くなったそれを握りしめた。

「……っ、フリーレン」「……ふふ。ピクピクしてる。……可愛い」

彼女は握る強さを変えながら、ゆっくりとしごき始めた。まだ朝の気だるさが残る頭に、鋭い快楽が突き刺さる。

「……朝から、えっち。……でも、嫌いじゃないよ」

彼女は上半身を起こすと、覆いかぶさるようにしてキスをしてきた。昨夜よりも優しく、甘い、おはようのキス。唾液の味がする。朝の口臭さえも、互いの愛おしさを増幅させるスパイスになる。

しばらくの間、二人は布団の中でじゃれ合い、互いの体温を確かめ合った。窓の外では小鳥がさえずっているが、ここだけは時間が止まっているようだ。

「……ねぇ」

フリーレンが僕の胸に頬を乗せたまま、ぽつりと呟いた。

「……エルフの一生は長いよ。人間にとっては、想像もつかないくらい」

彼女の指先が、僕の心臓の上をなぞる。ドクン、ドクンという鼓動を確かめるように。

「……昔は、その長さが退屈だった。……でも、今は違う」

彼女は顔を上げ、透き通るような緑色の瞳で僕を射抜いた。

「……君とのこういう時間は、一瞬だけど……永遠みたいに濃い」

「……フリーレン……」

「……だから、責任取ってよね。……私が飽きるまで、……ううん。君の寿命が尽きる最後の瞬間まで、私を気持ちよくして」

それは、彼女なりのプロポーズであり、絶対的な契約の言葉だった。

「……あーあ。また濡れてきちゃった」

彼女が自嘲気味に笑い、自分の下腹部を指差す。僕の愛撫を受けたわけでもないのに、言葉を交わしただけで、彼女の秘所からは透明な蜜がじわりと滲み出し、シーツの汚れをさらに広げていた。

「……身体が、君を覚えちゃったみたい。……どうしてくれるの？」

彼女は妖艶に微笑むと、再び僕の上に跨った。豊かな胸が揺れ、甘い匂いが鼻孔を満たす。

「……朝ごはんの前に、もう一回。……おかわり、いいよね？」

拒否権など、最初からなかった。僕たちは再び重なり合い、湯けむりの宿に、甘く激しい

愛の音色を響かせた。

悠久の時を生きる彼女にとって、この旅の記憶は、宝石よりも輝く「たった数日間の永遠」となったのだった。

（完）